

財団法人北海道医療団グループ 帯広第一病院 消化器内科／消化器内視鏡センター

【住所】北海道帯広市西4条南15丁目17番地3【院長】富永 剛 先生【病床数】303床【内視鏡検査・治療総数】5,629件(平成22年度):上部消化管内視鏡検査 3,318件、下部消化管内視鏡検査 1,149件、ERCP 286件、カプセル内視鏡 5件、DBE 1件、胆膵EUS 134件、消化管止血術 116件、EMR/ESD 357件、MS留置術 17件、PEG 95件、EST 111件、総胆管結石載石術 109件、ENBD 100件、EBD 47件、IDUS 46件、他【スタッフ】消化器内科医師 2名、看護師 10名(うち、内視鏡技師 4名)【スコープ本数】上部用 14本、下部用 8本、十二指腸用 4本、小腸用 1本、超音波内視鏡 2本(ラジアル1本、コンベックス 1本)



地域医療の中心となる 内視鏡「センター」を目指して 患者利益を拡大する質の高い医療を提供

患者一人ひとりとじっくり向き合う医療を 救急から慢性期医療までをカバーする ケアミックス病院

帯広第一病院は1974年の開設以来、十勝医療圏における二次救急医療の中核を担い、救急から急性期、慢性期まで診療可能なケアミックス病院として地域医療に貢献してきました。回復期リハビリテーション病院、慢性期病院、介護老人保健施設などを関連施設に持ち、訪問看護やヘルパー、ケアマネジメントなどの介護事業を展開することで細切れになりがちな医療をつなぎ、救急から急性期、慢性期、そして在宅まで、患者の皆様一人ひとりとじっくり向き合った医療を提供することを目指しています。

同院は2010年4月に化学療法センターを開設し、また同年9月には「日本がん治療認定医機構認定研修施設」に認定されています。がん治療に関しては、各種分子標的薬をはじめとする新薬が次々に承認され、がんに対する化学療法(抗がん剤治療)は多様化を極めていますが、化学療法センターではこのように複雑化した治療をがん治療認定医が中心となって行い、患者様により充実した医療体制で安心して抗がん剤治療を受けていただけるよう努めています。

最新の設備と技術をタイムリーに取得し 質の高い先進医療を地域に提供

同院では早くから消化器系の診療に力を入れており、2009年4月には最先端の内視鏡機器を備えた消化器内視鏡センターを開設しました。以来、地域の開業医からの紹介が年々増加し、現在では内視鏡関連の検査や治療は全体で年間6,000件にも上ります。ERCP関連の症例数も300件近く、この数字は北海道内の都市部にある総合病院の症例数に匹敵します。同センターでは日本消化器内視鏡学会専門医・指導医、日本消化器病学会専門医を中心にあらゆる消化器疾患を診療しているのが特徴的で、2009年12月には十勝管内で初となる「日本消化器内視鏡学会指導施設」に、翌

2010年9月には「日本消化器病学会認定施設」に認定され、さらに2011年4月には「日本肝臓学会関連施設」に認定されるなど、広範かつ最先端の診療を行うとともに、年間1~3名の研修医を受け入れるなど人材育成も積極的に行っています。消化器内科の副部長で消化器内視鏡センターのセンター長を務める三関哲矢先生は、「センター設立にあたっては、単に院内の内視鏡検査や治療の機能を集中させただけでなく、名実ともに地域医療の中心となる内視鏡『センター』としての役割を果たそうと考えました。NBIおよびハイビジョンスコープ、拡大内視鏡、細経(経鼻)内視鏡、コンベックスEUSなどの内視鏡機器を他院に先かけ導入し、現在考えられる最先端の検査や治療を実施できる体制を整えました」とご説明されました。



消化器内科副部長 消化器内視鏡センター長
三関 哲矢 先生



最新機器を備えた内視鏡室



▶次ページへつづく



Defining tomorrow, today
in Endoscopy.

安全で確実な検査を行うため 感染管理を徹底した環境整備を実践

消化器内視鏡センターでは、指導医を含む2名の専門医と専属のスタッフ10名で多くの検査や治療にあたっています。スタッフは消化器内視鏡技師の資格取得が推奨されており、現在4名の内視鏡技師が在籍しています。医師、スタッフともに経験豊富なマルチプレイヤーが集まり、限られた陣容で広範にわたる内視鏡診療を効率よく行っています。センター開設時に検査室を3部屋に増やし、前処置室・リカバリー室の拡張やリクライニングベッドを導入するなど、患者様にリラックスして検査を受けていただける環境を整えました。より安楽な検査を提供するため、セーションを用いた検査も積極的にやっているそうです。

また、同センターでは感染対策にも非常に力を入れています。検査台はディスポーザブルシートを用いて患者毎に交換し、検査後は「消化器内視鏡の洗浄・消毒マルチソサエティガイドライン*」を基に検査台や床も含めた検査環境全体の清潔を保つことを徹底しています。スコープは4台の自動洗浄機と1台の超音波洗浄器を用いて上部・下部を用途別に洗浄・消毒を行い、市販のソフトウェアを用いて症例情報の登録とともにスコープ洗浄・消毒の履歴管理を行っています。三関先生は、「内視鏡処置具は、リユース製品しか販売していないもの以外は全てディスポーザブル製品を使用しています。多少余分にコストがかかったとしても、安全性を担保するためなら必要な経費だと考えており、院内の理解も得ています」とコメントをされました。



プライバシーにも配慮したリカバリールーム



自動洗浄機

患者目線で考えられた独自の検査予約システム Colon Direct System

患者様にとって最善の医療を迅速に提供するため、消化器内視鏡センターでは外科との緊密な連携を重視しています。週に1回合同カンファレンスを行い、手術の適応となる患者様の紹介や治療方針を検討しています。術後のフォローアップを目的とした内視鏡検査も、患者様が絶食していれば即日対応するなど、臨機応変な対応が実践されています。また、患者様の利益を最大限に配慮した独自の検査予約システム「Colon Direct System (CDS)」を構築し、近隣開業医から高い評価を得ています。三関先生は、「これまで開業医の先生から大腸内視鏡検査を目的とした患者様をご紹介いただく場合、まず患者様に当院へお越しいただいた上で既往歴や内服薬の確認を行い、検査食をお渡しして後日検査にいらしていただく流れになっていました。患者様の中には遠方からいらっしゃる方も多いので、初診・検査・検査の結果説明と3度来院いただくのは少なからずご負担になっていたと思います。このCDSは、大腸内視鏡検査をダイレクトに予約可能で、検査食、下剤、説明資料を当院から患者様のご自宅へ直接お送りし、検査に備えていただけますので、患者様の負担を軽減して迅速な検査を行うことが可能になりました」とご説明いただきました。

このような画期的なシステムを導入していることから伺えるように、消化器内視鏡センターでは患者様の負担軽減と利益拡大のために様々な改善と新しい取り組みを行っています。特に三関先生は、ご自分の人脈を活かして帯広厚生病院などの大型施設とも頻りにコミュニケーションを取り、患者様の紹介や受け入れ、救急体制の分担を行うなど、地域全体での医療サービス向上に努めておられます。「帯広第一病院の消化器内視鏡センターにとどまらず、十勝地区全体のセンターになりたい」という三関先生の言葉は、このような日々の努力とたゆまぬ挑戦に裏付けられているのだということが、先生の真摯な姿勢から感じられました。



消化器内視鏡センターのみなさん